

説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

人には、その人でなければ分からない、心の悩みというものがあるものです。私の心の深い所での悩みは、家族でさえも中々分かって貰えないし、逆に、他人の心の深い部分での悩みについても、そう簡単に理解できないという面があります。それは同時にその人の「内なる戦い」ということにおいても言えるのではないのでしょうか。

また、その人がどういう魂の葛藤をしているのか、霊的な戦いをしているのか、と言う点でも同じようなことが言えるかもしれません。それは逆にいえば、その人だけが戦わなければならない霊的な戦い、自分だけしか戦えない霊的な戦いへの神様からの召しと言えるかもしれません。

その意味では、今日の箇所は、神の子であるイエスだからこそ受けた試練でありました。しかし一方で、もし神の子と悪魔の力試しの出来事に過ぎないとすれば、それは別世界の話であり、人間である私たちにとってどんな意味があるというのでしょうか？

私たちが、なぜこのテキストを、毎年四旬節第一主日に覚えるのか。それはこの出来事が主の十字架への道の始まりであるからです。と同時に主イエスに従って歩む私達が通らなければならない道だからです。この道を一緒に歩いていくように私達は今日招かれているのです。

今日の出来事は三つの福音書に記されています。マタイとルカはそれぞれ三つの誘惑の内容を描いていますが、マルコは誘惑の内容を全く記していません。しかし、じっと目をこらし耳をすませて、この箇所に集中していく時、マルコがこの二節に込めた思いが聞こえてくるような気が致します。その手がかりとなるのは前後の出来事です。

直前には主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになったことが語られています。そして、その時に「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声を聞かれました。その直後の出来事が荒れ野での誘惑なのです。

「40」という数字の意味は週報に解説を載せておきましたが、単なる研修期間ということではありません。サタンの誘惑は主イエスの生涯の最初から最後まで繰り返し、手を変え品を変え執拗に行われたのです。そして「最後の誘惑」は「メシアなら十字架の上から降りて見ろ」と言うあの言葉でありました。

「試練」と「誘惑」、これは原語では同じ言葉が用いられています。誘惑は、本来あるべき状態、正しい道から踏み外させることを意味しています。三つの誘惑を描かなかったマルコはただ一つのポイントに的を絞っています。それは「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という神さまの声を疑わせようということです。そして悪魔は次のように囁きかけるのです。「あなたは本当に神の子なのか？ 神が本当にあなたにそう言ったのか？」と。

マルコは具体的な誘惑の内容を記さない代わりに、不思議な言葉を記しました。主イエスは「野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた」という言葉です。野獣は最初から野獣とは呼ばれていませんでした。



しかし、人間が罪を犯し神さまに背いた後に、人間に敵対する存在として野獣と呼ばれるようになったのです。荒れ野とはこの野獣が住む場所のことです。そして私たちの魂の中にも、この荒れ野がある。私達が主の御言葉を信頼し、依り頼むことが出来るか、それとも悪魔の誘惑に耳を傾けてしまうのか。野獣と天使が同居するような緊張関係、信仰の戦いが日々私たちの内側でも繰り広げられているのです。

神さまを信じる者にとって、最大の試練・誘惑とは一体何でしょうか。それは、最も苦しいときに、神に頼るのではなくて、それ以外のもの、見える力、人間、財産といった偶像に逃げてしまうことです。神さまは試練を通して私たちと出会うとされます。その肝心要のとき、神さまによってしか生きられない正にその時に、真の神から離れてしまうのです。これが信仰者にとって、最大の試練であり誘惑なのです。いわば、「苦しいときの神頼み」ではなく、「苦しいときの神離れ」の悲しい現実が、信仰者、特に洗礼を受けて間もない信仰者に多く起きています。

日本で、洗礼を受けてから、教会から離れてしまうまでの平均クリスチャン寿命を調査した結果があります。驚くことにその期間は3年でありました。数十年の信仰歴の方が多くいらっしゃることを考えると、早い人は受洗後すぐに教会から離れてしまう方が多いということです。私は大きく二つ理由があるのではと思います。一つは洗礼という出来事に、何か神秘的な力、またはご利益を期待していた場合です。例えば、洗礼によって自分の性格や人格が変わると思ったとか、運が向いてくるのではといったことを期待していたのに、何も変わらなかった、いやむしろ厄介ごとが増えたり、教会とは汚れのない清い場所、清い人々の集まりだと思っていたのに、牧師や先輩クリスチャンの姿に幻滅し、人間関係に躓いたりといった場合です。

二つ目は、悪魔が主イエスに囁いたように「もし、あなたが神の子なら」という誘惑です。私たちは洗礼によって、「あなたは私の愛する子、心に適う者」と主イエスと同じように父なる神から呼びかけられています。しかし、現実の自分自身を見る時に、とても神様の心に適う者と呼ぶことの出来ない自分を見いだします。そこで悪魔は語るのです。「あなたは洗礼を受けたクリスチャンでしょう？ それなのにどうして、そんなに弱く、みじめなままでいるのか？ 本当にあなたは神の子とされたのか？ もし、あなたが神の子なら、今抱えているあなたの悩みや問題を神に解決してもらったらいじゃないか」。

そして神さまに祈るのです。しかし、何も変化は起きない。そして信仰なんて絵空事ではないかと疑いを持ち始めるのです。また逆の場合もあります。神さまに自分の求めを祈り、それが叶えられた時、私たちはその恵みにのみ目をとめ、恵みを与えて下さるお方を仰ぐことを忘れてしまうのです。

四旬節とは、主イエスが歩まれた試練の道、十字架への御跡を、私達が悔い改めと感謝をもって従いゆく期節なのです。私達の現実においてどんなに信仰の闇が深くなろうとも、この闇の先に、主イエスのご復活の希望があることを私達は知っています。なぜなら、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と、主はご自身の命をかけて、今日私たちに確かに語りかけて下さっているからです。

十 人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン